
有名騎士と悪魔達

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有名騎士と悪魔達

【Nコード】

N7769Q

【作者名】

k o t o r i n a k i s e k a i

【あらすじ】

・優秀な騎士が居た。その騎士の力は人間離れしており、他の人間よりはるかに多くの手柄をあげていた。なぜそんなことができるのか？ それは男に悪魔達が付いているからである……。

【この作品は他サイトと二重投稿しています】

ある有名な騎士の男が居た。その騎士は戦場で誰よりも敵を倒し、誰よりも手柄をあげて異例の速さで昇進して行った。

それ故この騎士には噂が絶えなかった。完全に後ろから切りかけられたはずなのに、気付いたら切りかかった方が切り裂かれていた。この騎士が戦場で同時に別の場所に存在していた。などといった噂だ。

中には騎士の頭に矢が命中したが、それを軽々と抜き、何事もなかったかのようにまた戦いに出て行くのを見た者すらいる。

しかし、それはどれも噂に過ぎないと人々は考えていた。騎士があまりにも強いので、そう言う超人的な噂が広がったのだらうと皆思っていた。だが実はその噂はどれも本当なのだ。騎士には悪魔達がついている。

騎士がまだ下っ端の頃の出来事だ。その頃騎士には——現在もだが——黒魔術の趣味があった。魔術書と言われるものは片っぱしから集めて、それに書かれている儀式を実際に行うこともよくあった。そしてある時騎士は、本当に悪魔を呼びだしてしまったのだ。呼び出した悪魔は四体で、それぞれ『嫉妬』『憤怒』『冷酷』『残酷』の悪魔だった。

男は悪魔を前にして狂喜した。自分が呼び出した悪魔に殺される可能性すらあったというのに、騎士は心の底から喜んで悪魔を迎えたのだ。

酒や料理を振る舞い、自分の持てる限りの黒魔術の知識で悪魔達に話しかけた。

悪魔達は隙あらば騎士の命を奪ってやろうと考えていたが、騎士と接しているうちに考えを変えた。そして悪魔達は騎士に提案をした。

「我々はお前が気に入った。これからお前に協力してやろう」

「悪魔と契約か。実に王道だ。黒魔術師全員の夢と言ってもいいだろう。だが私になりたいのは魔術師ではなく騎士だ。お前達と契約することはできない」

その返答を聞いて悪魔達は笑う。

「違う違う。気に入ったから協力してやると言っただろう？ それは契約ではない。我々が一方的にお前に力を与えてやる。お前は何も代償を払わなくていい」

「代償を払わなくていいとは……それ以上胡散臭い契約もないな」
「だから契約ではない。我々はお前に惚れたのだ。悪魔の力だぞ？ 欲しくは無いのか？」

騎士はなかなか悪魔達の言葉が信用できなかったが、どんなに探りを入れても自分が何か失う様な内容は出てこなかった。

「どうしても納得できないというなら、お前は悪魔を従えたと思えばいい」

「悪魔を従えた？」

「お前は我々を引き付けるものを持っている。我々はお前の魅力に負けて屈服した。つまり支配されたと思っただけ。支配された以上お前は主で我々は奴隷だ。お前には決して逆らえない」

「そうか……私は悪魔を屈服させたのか……。悪魔の主……。悪くない！」

そうして騎士は悪魔を従えた。

悪魔達はそれぞれの分野で騎士に力を与えた。

『嫉妬』の悪魔は向上心を、『憤怒』の悪魔は精神力を、『冷酷』の悪魔は平常心を、『残酷』の悪魔は強靱な魂をそれぞれ与えた。

悪魔達はそれだけではなく、騎士に悪魔の力を次々付与して行った。気付けば騎士は誰にも負けない不死身の騎士となっていた。悪魔の力を使いこなす最強の騎士。そして騎士は次々戦果をあげて昇進していく。誰も追いつけない速さで……。

ある戦争の帰り、騎士は騎士団長に話しかけられた。

「今度の戦争もお前が居てくれたから勝てた様なものだ。上の方はまだ若すぎると言ってお前の昇進を渋っているが、今回の戦果を報告すればその判断も覆るだろう。私の次の騎士団長はお前だ」

「騎士団長にそんな言葉をかけていただけるとは光栄です。あなたがよく目にかけてくださるから、私の今の地位があるのだと思っています。騎士団長には感謝してもしきれません」

騎士団長は謙虚な奴だと言って離れて行った。しかし騎士の中では舌打ちをしていた。

（俺は間違いなくあいつより強い。俺の方が騎士団長に相応しいのは明らかだ。今は若いという理由で昇進できずにいるが、いずれあいつが俺に敬語を使うようになるんだ）

『それは無いな』

騎士の心の中の呟きに、『嫉妬』の悪魔が声をかけてくる。悪魔はこの騎士以外には姿は見えない。

（なぜだ？）

『お前がいくら戦果をあげても、あいつが騎士団長である限り、お前が騎士団長になることはあるまい。今の騎士団長には人望があるがお前にはない』

（何を言う。私を尊敬する者は多くいる）

『その尊敬はお前の武力に対する尊敬だ。人格に対するものではない。このまま昇進をつづけても重要な右腕で終わるだろう。今の副団長と同じだ。お前が騎士団長になるにはあいつが引退するのを待たなくてはならないだろう』

（そんなのは嫌だ！俺は一刻も早く騎士団長になって軍を率いる男になりたいんだ！）

騎士の主張に悪魔が微笑む。

『なら騎士団長が死ねばいいだけだ。お前が直接手を下すまでもない。騎士団長は謎の病にかかって死ぬ。もつとも、お前が望まなけ

れば騎士団長が病にかかることは無いだろうがな』

望んだところで病にかかるはずがない。悪魔は命令しろと言っているのだ。そして騎士もそれに当然気付いている。

（心から願おう。騎士団長さえ死ねば俺はいくらでも昇進できる）

『期待していると良い』

そう言って悪魔の声は消えた。

騎士達は国に帰り、国民達の称賛の声に迎えられた。

凱旋パーティーが面倒だった騎士は、自分の部屋へ戻ることにした。騎士は今回も手柄を多く挙げた。この程度のわがまは許される。

「……趣味の悪い落書きだ」

騎士の部屋のドアが汚されていた。屈辱的な言葉もいくつか書いてある。騎士が急激な速さで昇進し始めてからこのようなことは度々あった。力の無い無能な者がやっているのだろう。

『馬鹿な奴もいたものだ。これをした者は何か益を得るのか？ 自分の卑屈を少し満たすだけではないか。まったくもって腹立たしい』

『憤怒』の悪魔が声をかけてきた。

「私も全く同じ気持ちだ。明らかな不正だというのに、これに怒って見ればこれをした者は喜び、私は信用を失うこととなる。私はこれに耐えなければならぬということが腹立たしい」

『だが放置すればこれをした者は調子に乗り、お前の威厳も失われるだろう』

「私はこれをされた最中戦争に行っていたのだから、これをした者を知っているわけがない。もしこれをした者が事故に会ったとしても、罰が当たったのだと周りの者達は思うだろう。まさか私が疑われることはあるまい」

そう言って騎士は悪魔に目配せをする。明らかな指示。

『事故にあつて死ぬ間抜けが、どんな顔をしているか楽しみにしている』と良い』

悪魔は騎士にお辞儀をして消えた。

別の日。騎士が町の周りを散歩していると女の悲鳴を聞いた。

「どうかお許しください！ 私は何も知らなかったのです！」

その声の方を見ると、女が数人の男に囲まれて暴行を受けていた。

「あれはいつたいたのだ？」

「間抜けな女が借金取りに殴られているだけの話だ」

『冷酷』の悪魔が話しかけてきた。どうやらあの女がどうして暴行を受けているのか知っている様子だった。

『あの女には夫がいた。すでに病気で死んでしまったがな。男は自分が助からない病気だと分かって絶望し、女に黙って多額の借金をした。それから毎日宴会三昧。当然金を返す気など毛頭なかった。男は借金をしたことを女に黙ったまま死に、女は夫が残した借金を丸ごと相続したというわけだ』

騎士は借金の額を聞いた。それは騎士にとってははした金程度のものだった。今すぐにでも払うことも可能だ。

『お前はあの女をどう思う？ 憐れむに値すると思うか？』

「なんだ？ あの女には憐れむ部分があるのか？ 私にはその部分がまるで見当たらないぞ。夫の財布の管理くらいしっかりしておけば良かったではないか。それ以前に、妻に不幸が降りかかることを承知で、借金をして死ぬような男に惚れた女が愚かだ。それに女がもし憐れむに値するとしても、私が助ける義理は無い。金はあるすぎで困るという事は無い。一銭たりとも他人にくれてやる金なんぞ私にはない」

『それでこそわが主だ』

悪魔はそう言って笑い、再び消えた。

それからしばらく経ってまた戦争が起こった。騎士は当然出陣する。

今回も騎士は破竹の勢いで敵陣に攻め込み、次々に敵の兵士を倒

して行く。蹴散らすだけでなく確実に殺す。腕を吹き飛ばし、足を切り取り、胴体を碎き、頭を破裂させて敵を殺す。

「ま、待ってくれ！ 降参だ！ 負けを認めるから命だけは助けてくれ！」

敵の一人がそう言つて騎士に命乞いをした。気付けばその一人を除いて殺しつくしてしまつたらしく、あたりは血の海となつていた。この敵一人を殺さなくても、戦争に影響が出るはずはないが……。

「お前も兵士の一人なら、国のために華々しく死んでみたらどうなんだ？」

「冗談じゃない！ 俺は無理やり徴兵されたんだ！ 国には妻や子供がいる！ 頼むから……」

『我が主はどうされるのか？ この兵士に同情して見逃すのか？』『残酷』の悪魔が話しかけてきた。

（同情……？）

『この者はお前のように志願して兵士となつた訳ではない。無理やり徴兵されたのだ。国に忠誠を誓っているわけではないのだから、国のために華々しく死ぬというのは理解できまい。それに国には妻や子供がいるそうぞ？』

男にはそれが同情に値することには思えなかった。

（だからどうした？ 男は今こうして兵士としてここにいるではないか。理由はどうあれ、それは敵を殺してやるという意思表示に他ならない。ならば殺されることも覚悟の上のはずだ。国に妻や子供がいるつて？ ならば意地でも帰つて見せればよかったではないか。それをしなかったこの者の怠惰だ）

「それにな…… お前は教えてくれたじゃないか……」

そう言つて騎士は槍を構える。命乞いをした男は逃げ出した。だかもう遅い。騎士が殺すと決めた以上それは絶対だ。

「人が殺される瞬間…… あれは美しい」

騎士は槍で兵士を突き刺した。それを持ち上げて、まだ息のある兵士が槍に突き刺さつたまま悲鳴をあげてもがく姿を鑑賞する。

やがて兵士が絶命して動かなくなると、槍から兵士を外してばらばらに切り裂き、誰が見ても死んでいると確認できる肉塊に変えた。

『ああ、お前は実に我らの主に相応しい男だ』

残酷の悪魔はその殺戮ショーを眺めてから消えた。

騎士は悪魔の力を得るために何かを代償になどしていない。ただ、影響を受けているだけだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7769q/>

有名騎士と悪魔達

2011年8月3日03時23分発行